

〔松屋筆記〕四オイラン、松位、大夫などの義。○中略

また字に松位とかくは、大夫といふべきを、秦の始皇が松を大夫に封せしといへる故事によりて松位とはかける也、さて遊女を大夫といふは、もと白拍子のともがらにて、みづからうたまひするがゆゑに、淨瑠璃大夫になすらへてよべる也、淨瑠璃大夫の號は、院中にめされて、叡聞ありし時、かりに五位を賜はりしに起れり、

〔一目千軒〕天神之事、井大天神之事

むかしは價廿五匁なりし故御縁日に表して天神といひならはせけるとぞ、其縁をとりて、此職を梅の位と云、是則御神木の由縁也。○中略此職より太夫にもす、む前々は大天神小天神とて、二しな有、あたひも高下ありて、大天神は四十三匁にて、もらひ十三匁はありしに、寶曆元未年やみたり、今は大小の差別なし、只天神と許り也、大天神今はなし、

〔異本洞房語園〕上、京都遊女の名目。○中略

天神 勤銀廿五匁なれば、北野の縁日に取て天神といふ、吉原には此名なし、

格子 京都の天神に同じ、大格子の内に部屋を構居る、局女郎に紛れぬやうに、格子といふ名を付たり、

散茶
うめ茶

〔異本洞房語園〕下、散茶。寛文五年巳のとし、江戸所々に居し茶屋共、吉原へ降参して、七十餘人入

込たり。○中略降参の者共は、風呂屋くづれ多く有しゆへ、見せを風呂屋の時の如く構へたり、今の散茶これなり、扱岡より吉原へ來りし遊女は、いまだはりもなく、客をふるなど、いふ事はなし、さればいきはりもなく、ふらずといふ意にて、散茶女郎といひけり、是は吉原遊女共が、時の戯に散茶女郎といひしが、いひ止すして、今に散茶といひもて來りしなり、

〔洞房語園異本考異〕下、このさん茶、むめ茶に、甚だ杜撰多し、今考ふるに、本説房語園に、今まで吉